

大空 (生徒・保護者向け) 39号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年6月19日(土)

オール1の落ちこぼれ教師になる—高3進路説明会挨拶—

□本日の概要

○本日伝えたいNFC

感性 自他肯定力 行動力 想像力

○受験を迎える高校3年生の皆さんは不安だろうが、皆さんは「未知の我」であり、これから大いに伸びる。自分と先生達を信じて、自分に合ったやり方で努力して欲しい。

○伸びるためには、徹底した前向き思考が必要である。そのためには、前向きな言葉だけを使い、マイナス言葉を使ってはならない。

○本日は、愛知県にある豊川高校の数学教師、宮本延春さんを紹介する。彼は中学校時代オール1で高校にも進学できず、かけ算の2の段も言えなかったが、テレビで見た物理学に感動し、名古屋大学理学部物理学に進学、大学院まで行き、母校の数学の先生になった人物である。長文であるが、彼の生き方、彼のメッセージを読んで欲しい。

□前向きな言葉をつかう—「3D」から「3S」へ

高校3年生の皆さんは、高校総体も終わり、いよいよ大学入試だという気持ちが高まりつつあると思います。同時に、自分の進路や、志望校に対する学力など、様々な不安も頭をもたげてきます。しかし、それは当然です。皆さんはまだ18歳、様々な体験をしてきたと言っても、まだまだ「未知の我」状態で、様々な可能性を秘めています。だから、今の段階で、様々なことに答えを出してしまうのは早計です。まずは、自分の未知の可能性を信じ、先生のアドバイスをもらい、自分に合ったやり方で努力してください。

そのために大切なことは、肯定的な言葉だけを使うことです。おすすめは、「ほめる達人協会」の提唱する、「3S」です。これは「すごい!」「さすが!」「素晴らしい!」の3語で、「素敵!」を加えてもかまいません。

逆に、言うてはいけないマイナス3語が「3D」といわれます。この言葉を使わないために敢えて言いますが、これは、「でも」「だって」「どうせ(無理)」の3語です。言われてみると、私たちは、無意識のうちに、この否定的な3語を使っているような気が

します。今日、この機会にその口癖はやめて、何でも「3S」思考で行きましょう。繰り返しますが、君たちはダイヤモンドの原石、まだまだ磨かれておらず、磨けば絶対光ります。磨くための第一歩が、例えば、前向きな言葉を使うことのような、ちょっとした意識の転換なのです。

□オール1の落ちこぼれ、教師になる

意識を変えても何も変わらない、現実はずっと厳しいのだ。そう思うかもしれませんが、本当に厳しい状況に陥りながら、あるきっかけで、がらりと人生を変えた人はたくさんいます。私は、昨年、前向きな考え方や、ちょっとしたきっかけで飛躍した先輩方の例などを紹介してきましたが、今日は、宮本延春さんという人を紹介します。私は、数年前、宮本さんの講演を聞く機会があったのですが、本当にこんなに人は変わることができるのかと感動をしたのです。



宮本氏略歴

1969年 1月4日生まれ。愛知県半田市出身。小学生の頃から、体も小さく、“いじめ”の標的にされていた。中学校に進み、最初にもらった通知表は、「オール1」。義務教育を終えた時の通知表も技術家庭・音楽が「2」で残りはすべて「1」だった。「九九」を全部言うことさえも出来な

かった。

中学校卒業後、大工の道に進み、厳しい指導の中、最愛の理解者である「母」を亡くし、思うところあり17歳で大工をやめる。その後、地元の建設会社に就職。

1992年 23歳の頃、1本のビデオ「アインシュタインの理論”光は波か、粒か”」との出会いから、物理学に興味を持ち、大学進学を決意する。夢への道は、小学校3年生のドリル・九九のマスターから始まった。

1993年 24歳の春、猛勉強の末、地元の高校(定時制)に合格。

高校3年の3学期、大学入試センター試験で、8割近い点

を取り、名古屋大学理学部を受験。見事合格し、1996年4月、27歳で名古屋大学に入学。その後、大学と大学院で、宇宙物理学を専攻し、素粒子などの研究に没頭。満ち足りた生活の中で、別の思いが芽生える。

2005年4月、36歳で、母校（高校）の教師になる。

2006年5月、テレビ朝日「スーパーモーニング」の”人捨てたもんじゃない”のコーナーで放送され、反響を呼ぶ。

2007年5月、テレビ朝日の「徹子の部屋」に出演。

2007年7月、教育再生会議委員に就任。

2007年11月、TBS「3年B組金八先生」のドラマの中で紹介され話題になる。

2010年日本テレビ「天才じゃなくても夢をつかめる10の法則」で紹介される

口いじめられ、勉強嫌いに

宮本さんは、学校と名のつくものすべてが嫌いでした。理由は、小学校入学時から悪質ないじめを受けていたからです。宮本さんは、早生まれの一人っ子です。転校が多く、内気で人と交わるのが苦手な生徒だった宮本さんは、小学2年生の頃、クラスのボス女子から目を付けられます。学校に提出するために持ってきた給食費を、その女子から「かつ上げ」されてしまうのです。宮本さんは、そのことを親に話し、親から学校へ連絡が行って、その女子生徒は先生から指導されます。そのことを恨みに思ったのでしょうか、宮本さんは、ボスとその取り巻きから徹底的にいじめられることになってしまいます。

例えば、宿題を出すとノートが消されます。授業中、手を挙げることも禁じられます。ちょっとしたでも頑張ったり、一生懸命な様子を見せると後で脅されるといふ日々で、体育の授業でも存在しないかのように振る舞わなければならないのでした。授業中は、先生に指名されることを極度に恐れていました。先生の指名に答えたりしたなら、後で何をされるかわからないのです。先生は事情がわかりませんので、宮本さんのことを、何を言っても反応しない子供だと思っていたことでしょう。

勉強をしたり、頑張ったりするといじめられますので、宮本さんは本当に勉強が出来なくなりました。宮本さんは小学2年生で九九が分からなくなります。彼は、「2の段」しか言えなかったそうです。宮本さんは講演で、「人生、2の段が言えれば何とかかなる」と言ってお聴衆を笑わせていましたが、実は、九九ができないということは大変深刻なことで、その後の学問はすべて分からなくなることを意味します。中学ではxやyが出てきますが、彼は、今が英語の授業か、数学の授業かも分からないくらい何も理解できなかったそうです。

口環境の大切さ

宮本さんは、勉強に対する意欲をすっかり失ってしまいました。勉強ができない、しようもしない宮本さんを見て、親も厳しく指導するようになります。もちろん宮本さんも、何とか勉強をしてみようとしたことがあるそうですが、ここまで勉強が出来なくなると、まず勉強のやり方が分からないのだそうです。教科書を見ても、ノートを見ても、何をしたらいいのか分からないのです。宮本さんは、勉強法が分からないまま勉強のまねごとを続けていましたが、とうとう、「どうせ勉強をやってもしかたない」と自分に対して諦めてしまいます。冒頭で紹介した「3D」の「どうせ」状態に陥ってしまったのです。宮本さんの父親は、土木作業や食堂等、様々な仕事を転々としていた人のようですが、荒っぽく、特にお酒が入ると暴力をふるい、手が付けられなくなる面がありました。ある時、勉強しない宮本さんに激怒した父親は、教科書を捨て、ランドセルと一緒に灯油をかけて燃やすという仕打ちをします。学校に持って行くものが何もなくなった宮本さんは、紙袋を持って小学校へ通いました。伸びきったゴムのようになっていた宮本さんに、父親の厳しい指導はむしろ逆効果でした。宮本さんは講演で「教育には環境が大切だ」と述べていましたが、宮本さんの家庭環境は教育的とは言いがたく、これが宮本さんが勉強嫌いに拍車をかけてしまったのです。

口オール1の成績

さて、宮本さんは中学校に進学しますが、そこでもいじめは続きます。成績はどん底です。中学校は9教科あり、1年生の時は、通知表の評定の合計が1桁だったそうです。この意味分かりますか？合計9点、つまりオール1だったのです。宮本さんは、自分でも勉強ができないと思ってはいましたが、オール1の通知表をもらったときは、さすがに応えたようで、自分で自分をもうダメだと思ったそうです。オール1の通知表は、まるで、ダメ人間の証明書に見えたそうです。中3になっても、技術と音楽が「2」になったものの、他の教科は「1」のままでした。（彼の著書には、オール1の通知表のコピーが掲載されています。）

口家庭の崩壊

宮本さんは、勉強が嫌で嫌でしかたがありません。高校に行く気がないし、そもそもオール1では行くことができる高校はありません。自分の名前しか漢字が書けないし、知っている英単語は、本屋の看板だった「book」だけ。担任の先生は、職業訓練校に行き、手に職を付けることを勧めてください、宮本さんはそこに行き、大工の技術を身につけようとしています。

そんなとき、宮本さんのお母さんが大腸ガンであ

ることが分かります。お母さんはすぐに入院しました。そのとき、宮本さんは、自分の周囲に頼れる親戚が皆無だということに気づきます。宮本さんには、祖父も祖母も、伯父も叔母もいない。宮本さんは、さすがに自分の境遇が特殊であることに気づきます。どうも宮本さんの両親は、結婚に反対され、駆け落ち同様に結婚したらしく、親兄弟とも縁を絶つたため親戚もなく、頼る相手もいなかったのです。

乱暴な父親と違い、お母さんは優しい人でした。幼い宮本さんに本を読んでくれたり、大切にしてもらった思い出ばかりです。それなのに、その大好きな大好きなお母さんは亡くなってしまったのです。

□どん底の生活

職業訓練校を卒業し、宮本さんは見習い大工になります。見習い大工の給料は月給7万円です。たったそれだけの給料で、自分のアパートの家賃に、すでに病気で働けなくなっていた父親の面倒まで見なければならなくなりました。

「赤貧」という言葉がありますが、宮本さんは信じられないほどの貧乏でした。大工の仕事場に通うために乗っていた自転車は、粗大ゴミの日に捨てられていたものです。その自転車には、サドルがなく、前輪が外れたりしたこともあったそうです。大工の仕事は厳しく、昔気質の親方からノコギリで叩かれ、血を流したことがあったそうです。宮本さんは自炊をしていたのですが、食事は毎日レトルトのハンバーグです。栄養状態は極端に悪く、口内炎だらけで話すこともできませんでした。サドルのない自転車に乗って、仕事場に行く途中、通学中の高校生を見ると、羨ましくてたまらなかったそうです。宮本さんは雑草のような生活。それに対し、学校に通える高校生は、まるで温室の中の胡蝶蘭のように光り輝いて見えたそうです。何で、自分ばかりこんなに不幸なのだろうと、彼は運命を恨みます。

大工の仕事は、もはや修行と言うより虐待ではないかと思われる程の過酷さになっていました。宮本さんを一人前の大工に育てようとするための厳しさではなく、殆どいじめの状態でした。宮本さんは、このようなひどい仕事をしていて、20年、30年たったとき、自分が満たされているだろうかと疑問を持つようになります。自分の大切な時間は二度と戻って来ません。その貴重な時間を、満たされることがないと分かっているものに費やすということは、大変な無駄だと思うようになったのです。

我慢の限界に達した宮本さんは、大工をやめます。その頃の宮本さんは、音楽に熱中するようになり、音楽の世界に憧れるようになります。しかし、今度は父の病気が悪化しました。乱暴だった父は、母親の死後、別人のように弱々しい人間に変化していた

のです。もちろん働いていませんので、生活費がまったくありません。ところが、公的な援助はありません。すでに18歳になっていた宮本さんは、児童福祉施設に入ることもできないのです。自活するしかありません。宮本さんは、公園の雑草を食べ、蟻を食べたそうです。もちろん、お風呂も何もなく、雨の日に雨水で体を洗い、洗濯は雨の日に波トタンで洗うだけです。家に家電製品は皆無で、宮本さんは講演会で「電気製品がないのにコンセントだけはありました」と笑って話していましたが、こんな厳しい生活、今の日本で想像できるでしょうか。そのうち、宮本さんのお父さんも亡くなります。身よりもお金もない宮本さんは、遺体を引き取ることもできません。父の友人に助けられ、何とか葬式を終えることができました。とうとう彼は天涯孤独の身になってしまいます。

□運命の出会い

音楽に憧れながら、フリーターのような生活をしてた宮本さんが20才になった頃、建築会社のアルバイトを友人が紹介してくれました。ここで宮本さんに転機が訪れます。その会社の社長さんや専務さんが本当にいい人でした。宮本さんの境遇を聞き、同情した社長は、宮本さんに服をくれたり、食事をおごってくれます。自宅の風呂に入れてくれ、洗濯もさせてくれました。人の情に触れ、宮本さんは感動します。そのときの気持ちを宮本さんは、こう語っています。

皆さん、「当たり前」の対義語は何か考えたことがありますか。理屈で考えてみると、「当たり前」の反対は、「当たり前じゃないこと」になる。つまり、「特別なこと」、言い換えると「有りにくい」ことだ。これを漢字で書けば「有り難い」＝「ありがとう」になる。誰かから何かをしてもらって、「当たり前」と思っていたら、「ありがとう」という言葉は出てこない。特別なことをしてもらったと思うと、「ありがとう」という言葉がでる。「ありがとう」は万能の言葉だ。自分が他人から何をもらっているかに気づくためにも「ありがとう」という言葉を使おう。

社長の優しさに感動し、心の底から「ありがたい」と思った宮本さんは、社長の恩に報いたいと、一生懸命仕事を頑張ります。すると、その頑張りを社長が認めてくれ、アルバイトの宮本さんを何と正社員にしてくれたのです。宮本さんは、本当にうれしかったそうです。音楽の世界への憧れがなくなった訳ではありませんが、音楽の世界は努力が報われるとは限りません。宮本さんは自分の状況を考え、音楽は諦め、建築の世界で努力をするという現実的判断をします。始めて健康保険証を手にした宮本さんは、「これで安心して病気になれる！」と喜んだそうで

す。

□彼女との出会い

宮本さんは、中学の頃から少林寺拳法を続けていました。いじめられたくない、強くなりたいという思いからです。苦しい大工見習い生活の時も続けていたそうですから、彼の唯一の救いの場だったのでしょう。音楽に没頭していた頃は、少林寺から遠ざかっていたのですが、正社員になり、生活に余裕ができたころから少林寺を再び始めます。視野が広がってきます。道場に通う子ども達の指導をしたり、生活が充実してきます。

その道場で、宮本さんは再び運命の出会いをします。宮本さんの後に入門してきた女性がいたのです。何と彼女は黒帯。宮本さんは驚き、言葉を交わすうちに二人は親しくなり、交際するようになります。

宮本さんに彼女ができたのですが、その彼女は、国立大学を卒業した、ある会社の社長令嬢でした。しかし、宮本さんと言えば、これも宮本さん自身が講演会で語った言葉を借りると、「親なし金なしのくるくるパー」なのです。「世の中に男は山のようにいるが、良くこんな天然記念物のような男を見つけたものだ」と宮本さんは笑って話していました。

さて、建築会社では、図面等、ありとあらゆる場面で、計算能力が問われます。また、責任ある仕事をするためには、建築関係の様々な資格を取る必要が出てくるのです。宮本さんは、資格試験を受けようと思いましたが、宮本さんは、分数の足し算もできません。仕方なく、彼女に尋ねます。最初は丁寧に教えていた彼女も、宮本さんが九九も言えないという衝撃の事実が分かり、さすがに呆れ、このときばかりは真剣に別れようかと思ったそうです。しかし、宮本さんの彼女は人を見る目がありません。自分の彼氏が理解能力がないのではなく、学ぶ機会がなかっただけだと考え、宮本さんを見放さず、勉強を教え続けたのです。

□アインシュタインとの出会い

彼女、純子さんは、宮本さんに勉強を教えるだけでなく、宮本さんに幅広い教養を身につけてもらいたいと考えました。また、宮本さんと付き合いの中で、宮本さんが本質的なことが理解できる人だと気付いたのだと思います。純子さんは、教養を豊かにしてくれそうなテレビ番組、特にNHKを録画して、宮本さんに見るように勧めたのです。宮本さんも素直に純子さんのアドバイスに従いました。貧乏な宮本さんはテレビを持っていなかったのですが、粗大ゴミ置き場から捨てられていたテレビと、再生専用のビデオを拾ってきて、彼女の録画したニュース番組や教養番組を見ることにしたそうです。

その純子さんが録画してくれていた番組の中に、

NHKのアインシュタインの特集番組がありました。宮本さんは、その番組を見て、何とも言いがたい大きな感動を覚えます。宮本さんが初めて感じた知的興奮でした。そして、物理の世界を美しいと思い、物理学を勉強してみたいという気持ちが芽生えはじめたのです。これは本校が大切にしている「感性＝Art」の部分です。宮本さんの感性、つまり物理学が美しいと感動する心が学びの原動力になったのです。

しかし、宮本さんは、九九も約分もできない学力です。でも、「どうしてあのときにやらなかったのだろう」という後悔だけはしたくない。」と宮本さんは思います。あきらめる、これだけは絶対にしなくなかったのです。

□目標を見つける

物理学に興味を示した宮本さんを見て、純子さんは喜びます。そして、宮本さんに次の目標を示しました。それは、定時制高校への入学でした。宮本さんは純子さんの勧めに従い、高校を受検することを決意します。宮本さんは小学校3年生のドリルを買ってきて、純子さんに勉強を習うようになりました。働きながら、高校入試までに、小学3年から中学3年までの6年間の勉強をやり直すのです。宮本さんの決意を、勤務先の社長も快諾し、宮本さんの挑戦が始まります。宮本さん23歳の決断でした。

宮本さんは、ここで、大きな発見をします。あれだけ嫌で嫌で、苦痛でしかなかった学習が、喜びに変わったのです。高校に行くという目標ができたことが、宮本さんを劇的に変えました。また、彼を取り巻く環境が変わりました。幼い時の宮本さんは、常に回りから否定されて生きていました。学校ではいじめられ、親からは虐待に近い扱いを受け、誰からも褒められ、励まされ、認められるということがなかったのです。今は、頑張る宮本さんを褒めてくれる人がいます。褒め言葉がこれほど人を変えるとは、宮本さん自身も気づかなかったことでした。

努力の結果、宮本さんは豊川高校定時制に入学します。職場も、宮本さんが定時制の授業開始時間に間に合うよう、仕事の内容や、勤務場所を配慮してくれるようになりました。職場でも、24歳で高校生になったことが話題になりました。「いまさら高校生になってどうなるのか」という陰口がなかった訳ではありません。しかし、宮本さんは、迷惑をかけている会社に恩返しをするために、仕事も一生懸命こなし、とうとう「積水ハウス建て方主任」という資格を取得します。また、学校というものに恐怖を抱いていた宮本さんですが、この年長の高校生を、先生も生徒も温かく迎えてくれました。宮本さんは、「兄貴」というあだ名が付き、最年長ということでも

様々なリーダーがまわってきて、学校が楽しいと思うようになったのです。

□名古屋大学を目指す

高校に入学し、さらに宮本さんの夢は膨らみます。「自分は、アインシュタインと出会い、物理学を学びたいと思って高校に入った。物理学を本格的に学ぶためには、今度は大学に行こう。」と。

宮本さんは、雑誌等を見て、物理学が学べる大学を探します。ところが、宮本さんは、愛知県に住み、すでに仕事もあります。純子さんもいます。就職したとはいっても、経済的には苦しい状態です。調べたところ、愛知県で理学部物理学科があるのは、国立の名古屋大学だけだということが分かりました。皆さんが知っての通り、名古屋大学は東大や京大とならぶ旧帝国大学です。

宮本さんは、豊川高校の担任、上田先生に相談しますが、先生は話を聞いた瞬間、「無理！」と言い切ります。なぜなら、豊川高校70年の定時制の歴史の中で、名古屋大学はおろか、理系の大学に進学した者が一人もいないのです。しかし、宮本さんは諦めません。先生は、宮本さんの熱意に感じ、豊川高校昼間部の特進科の実力テストを受けることができるように便宜を図ります。そして、宮本さんの補習をしてくれるようになったのです。一口に補習といっても、私たち全日制の学校と同じように考えないでください。定時制の授業が終わるのは、夜の9時です。定時制の先生方は、私生活を犠牲にして、宮本さんのために遅くまで指導をしてくれたのです。大変な負担のほうです。給料も増える訳ではありません。

宮本さんは、そんな先生方の姿勢に感動し、先生の恩に報いたいと思うようになります。先生の恩に報いることは、自分の成績をあげることだ、そう思った宮本さんは、仕事と食事と睡眠以外はすべて勉強という生活を続けます。学校も、宮本さんを全面的にバックアップし、豊川高校の実験助手という仕事を紹介し、宮本さんが勉強に専念できるよう配慮します。宮本さんは、お世話になった建築会社を辞めるという苦しい決断をするのですが、理解ある社長は、宮本さんの決心を快諾してくれるのでした。

□皆の支え

豊川高校で、宮本さんの姿は噂になりました。いつも勉強をしているからです。ついに、高校2年の二学期には、数学の全国模試で全国トップをとるほどに成績が伸びました。多くの人が宮本さんを支えました。宮本さんの担任の上田先生は、実はお寺の住職でもあり、早めに退職して実家のお寺に専念する予定でした。しかし、宮本さんが懇願し、宮本さんが大学に行くまで、自分の退職を延期することに

しました。豊川高校の校長先生は、宮本さんが名古屋大学に不合格だったときのために、特別奨学生になれる私大を紹介し、初年度の入学金100万円は自分で出すとまで言ったそうです。(その私大の受験費用は校長先生の奥さんが出してくれたそうです)豊川高校の先生方は、カンパをして、宮本さんが勉強に専念できるように資金援助をします。

そして、宮本さんは、センター試験を迎えます。不本意な教科もありましたが、物理は100点をとり、結果的にはほぼ8割の得点、名古屋大学が狙える得点でした。受験のチャンスを増やすため、宮本さんは、センターを課す推薦入試、前期、後期と名古屋大学に出願し、背水の陣で臨みます。私立大学の特別奨学生試験に合格した後、名古屋大学の推薦入試の結果発表がありました。震える手で開封すると、自分の番号があります。宮本さんは見事合格、名古屋大学理学部進学を果たしたのです。

□教師を目指す

宮本さんは、名古屋大学に進学します。大学の勉強は高校以上に大変だったようですが、bookしか単語を知らなかった宮本さんが、ドイツ語の単位まで取るようになったのです。さらに名古屋大学理学部の大学院に進学し、修士課程、博士課程を終了します。物理学の研究者への順調な道を進んでいた宮本さんですが、ここで、「教師になりたい」という思いがわき上がってきます。豊川高校を卒業したときに感じた、「教育熱心で、情に厚くて、生徒思いの、この学校の先生方のように、自分も教育に携わりたい」という思いが、宮本さんの中に息づいていたのです。

宮本さんは、悩みます。豊川高校は別として、教育について、宮本さんは、苦しい思い出ばかりだからです。いじめられ、オール1の成績になり、18歳で家族すべてを失い、貧困の中にいた宮本さんが、勉強に目覚めることができたのは、信頼できる人との出会いでした。自分が救われたように、自分と出会うことで何か変わる人がいるかもしれない、その人に希望や夢を持つすばらしさを伝えることができるかもしれない。挫折に苦しんでいる少年少女に、世の中の厳しさや、夢を持つことのすばらしさを、人生の目標を見つけることの手助けをしたい、そう宮本さんは強く思うようになります。

こうして、宮本さんは、物理学の研究者から、教師の道を選び、36歳の時、母校、豊川高校で数学の教師になります。宮本さんを支え続けた彼女、純子さんとも結婚し、教師として、そして子どもも生まれ、優しいお父さんとしても一生懸命の日々を送っています。

□宮本さんから高校生へのメッセージ

1) 自分の視野を広げよ

人間には、自分の見えている視野にしか選択肢がない。逆に言えば、今、自分に興味関心のあるものがないという人は自分の視野の外にある可能性があるということだ。

ということは、自分に興味関心のあるものを見つけるには、自分の視野を広げる必要があるということだ。

それでは、視野はどうやって広げるのか。それは人やものとの出会いだ。

私は、アインシュタインと出会ったが、それは、実はテレビ番組との出会いだ。このように、たくさんの出会いを通じて、自分の視野は広がるのだ。君たちは、自分のエネルギーを、「自分の視野を広げる」ということに使ってほしい。

2) 成長の痛み

人は成長するときに、痛みを感じる。これを「成長痛」という。つまり、今、何らかの「痛み」を感じている人は、実は成長しているということだ。君たちは、今、成長が求められている。ということは、必ず、「痛み」や「悩み・苦しみ」があるということだ。逆に、「痛み・悩み・苦しみ」がないという方が怖いくらいだ。

「痛み・苦しみ」がない方がいいと思うかもしれない。しかし、実は、「痛み・悩み」はチャンスだ。どうせやらなければならないなら、ネガティブではなく、肯定的に取り組んでほしい。

3) 目標を持って

世の中には、勉強ができない子はいない。正しい方法で一定量をこなせば、必ず成績が伸びる。勉強には、「環境」と「目標」が大切だ。目標ができたたん、人間は劇的に変わる。自分がまさにそうだった。勉強ができない生徒は、多くはやり方に問題がある。いわゆるできない生徒でも、相應しいやり方が見つかると劇的に変化する。

4) 基礎学力の重要性

人間は、何か新しい知識を「分かった」と感じるときは、必ず自分の中の既存の知識や経験と結びつけて納得している。この「既存の知識」が基礎学力である。この「既存の知識」が多ければ多いほど、分かる世界が広がる。スポーツでたとえると、自分の目標が見えたときにすぐに走り出せる体力をつけるのが基礎学力だ。体力がないのに走ることはできない。それが学校で勉強をする意味であり、学校の役目だ。将来、何の役に立つのか分からなくても、この準備運動のメニューをきちんとこなすことが学校の勉強だ。勉強を、何の役に立つのか分からないと判断するのは早合点である。人の生きる意味は、目標、夢を持つことであるが、その夢を実現する過

程では、必ず「学ぶ」という行為が必要になる。夢を現実に変える、その来るべき日のために「学び方」を学ぶことが「学ぶ」意味である。

5) 救うことは甘やかすことではない

私は、努力してできない生徒はとことん救うが、努力しない生徒には「1」をつける。自分が「1」の辛さを知っているが、だからと言って、その生徒に甘い点をつけることは、本当の意味でその生徒を救うことにはならない。温情は、その生徒の人生のプラスにならない。駄目なものは駄目だとはっきり評価する。そのかわり、指導で、分かることの面白さ、楽しさを教えて、「1」状態を脱却させるようにしている。

6) 人の伸び方

人は、直線的には伸びない。そうではなく、人は、階段状に伸びる。最初はなかなか伸びない。たとえば自転車だ。最初は何回もこけるが、ある時こつをつかむと、自転車に乗れるようになる。人の成長は、この繰り返して、階段状に伸びるものだ。伸び悩み期は、誰もが苦しむ。スポーツではスランプと言われる時期だ。伸び悩んでいるときは、練習方法を変えたり工夫するしかない。今、伸び悩んでいる時は、この階段の平坦期に当たる。学習方法を工夫し続け、頑張っ

て欲しい。また、人には学習適齢期がある。私は例外的に遅かったが、多くの高校生にとっては、今が学習適齢期である。家賃や、食費や、授業料の心配をしないで学習に打ち込めるとしたら、こんなに恵まれた環境は今しかない。この境遇を大切にしたい。勉強のことを考えられるのは、それを支えてくれる家族がいるからだということをしっかり自覚して、「学ぶ」ことに打ち込め!

口おわりに

長くなりましたが、私は宮本さんの講演を聞いて、どうしても彼の生き方を皆さんに伝えなかったのです。「3D」で自分を決めつけていませんか。繰り返しますが、君たちは「未知の我」です。人間は、ちょっとしたきっかけで、良くも悪くも変わります。それを身をもって証明してくれた人がここにいて、多くの若者にメッセージを送り続けているのです。

詳しくは、宮本さんの著書を読んで欲しいと思います。特に、勉強に行き詰まったり、自分は頭が悪いと思いついていたりしている生徒諸君、この宮本さんの姿に勇気づけられませんか。ぜひ、彼の本を読んで、自分を大きく変えて欲しいと思います。

参考「オール1の落ちこぼれ、教師になる」

(宮本延春 角川書店)